

## スエズ運河の想い出

児玉 寛嗣

イスラエルによるパレスチナ・ガザ地区への攻撃を各国が非難している。報道によると、パレスチナの過激派組織ハマスとイスラエルの交渉がアメリカなどの仲介でようやく始まったようだ。行方を見守りたい。

ガザ地区の近くまで何度か出張で行ったことがある。それは二〇〇七年の前後、ハマスが選挙に勝ってパレスチナの実権を握った頃である。

カイロの空港から車で二時間ほど走るとスエズ運河のアフリカ側の畔の町、イスマイルに着く。この町のホテルからスエズ運河を隔ててアジア側にあるポートサイドという工業都市の火力発電所に毎日通った。そこからシナイ半島の荒涼とした砂漠を二百キロほど行くとガザ地区だ。

スエズ運河を渡る方法はふたつある。一つは船を使う方法である。運河を大きな船が数珠繋ぎになって進む。その合間を縫って運河を横切る。ドル箱となっている運河の航行が優先だ。対岸は目の前、しかし、一時間以上、待たされることはざらであった。船体が巨大な鉄の壁となって視界を塞ぐ。見上げると甲板には幾層ものコンテナが積まれている。

もうひとつは橋を渡る方法である。橋は日本の資金によって架けられ、建設当時のエジプト大統領の名前を冠して「ムバラク橋」というそうである。船の航行に支障がないように、運河に架かる部分を高くしたアーチ型だ。船よりも便利かというと、なかなかそうはいかない。特に仕事の帰り、アジア側からアフリカ側に渡る時である。パレスチナなど紛争地域に近いので検問は厳しく、橋の手前には大型トレーラーが列をなして止まっている。検問を経て車は橋を登って行く。橋からの眺めは壮観だ。一列に並んだ船、大きなコンテナも積み木のように見る。夜間には点々と続く船の灯りが水面に映え、ちよつとした光のショーだ。

今、ガザ地区のパレスチナ住民の極一部は平均年収の何倍もの金を払ってカイロ方面に避難するそうだ。どんな思いで運河を渡るのだろうか。